

女子大生のプロポーションの意識と着裝行動の工夫

田中千代 学園短大 ○小田 巻淑子、文教大教育 伊地 知美 知子

川村 短大 山田 寛、共立女大 家政 小林 茂雄

<目的> 現代のスリム志向のファッションの流れの中で、多くの若い女性が美しいプロポーションに憧れ、装うことにより自己のプロポーションをより美しく見せたい、見られたいと願っている。そこで現実の着裝行動において、どのような工夫を行っているのかを調査し、その背景にある自己の現実及び理想のプロポーションと着裝行動の工夫との関連について考察する。

<方法> 女子大生約200名を対象に、1991年10月～1992年1月にアンケート調査を行った。主な調査項目は着裝行動の工夫(43項目、該当項目を選択)、自己の現実と理想のプロポーション(身体部位など21項目、5段階評定尺度)などである。この場合、着裝行動の工夫の項目は予備調査で学生が挙げたものをもとに選定した。調査データは平均値の差の検定、因子分析などの統計手法によりプロポーションと着裝行動の工夫について検討した。

<結果> 着裝行動の工夫については、全体のバランス、下半身に対する工夫が上位を占めた。このことは現実と理想のプロポーションの調査において、両者の差の大きい身体部位は、太もも、ふくらはぎ、ヒップサイズなど下半身の部位となったことと関連がある。プロポーションの因子分析では、身体の周径因子(ウエスト、下半身)、身体の長さ因子、バスト因子は理想・現実のどちらでも抽出された。プロポーションの個人差は現実の方が大きく、特に首の太さに最もばらつきがみられた。